

550.1.16 痛みを忘れず 30年前のまよ 京都空襲

一月十六日。ちょうど三十年前の、昭和十年のこの日、東山区馬町一帯がB29に襲撃された。当時、モロトフのパンカチと噂された野矢武雄と関わっていた。それはそれはこの世の地獄、一とほにほななかつた。

「現在、私のからだの中にはまだ爆弾の破片が残っています。少々なごめ私の場合、戦争はまだ終わっていないのです。私からた

った人や、爆弾の破片が腹部に突き刺さったままになっているもの、はらわたが多数の血塊とどろろに潰れてしまったものなど、目をみみりおぼろけの修羅場と化していた。それはそれはこの世の地獄、一とほにほななかつた。

「現在、私のからだの中にはまだ爆弾の破片が残っています。少々なごめ私の場合、戦争はまだ終わっていないのです。私からた

に爆弾の破片を食し、私の手の中からかけがえのない涙と子供を奪っていった戦争。二度と戦争の悲劇を繰り返してはならない。」

この声は「かくされてきた空襲」の中の、被爆体験記のなかのほんの一部だが、せりりつと覚えずにはいられない。なごめ私の方々に對して哀悼の意を述べるとともに、死傷者の全部がなんらの補償も与えられず、身体障

害や後遺症に悩まされる現実に向かいたむ。あの日、二十三時二十分という一瞬はよりの大のうわしへ、若い人から赤ちゃんにいたるまで、その多いのちと、みなたのしめあそばさる、もぎ取った幼き命、あつち、あつち戦争を、私たちがしひき受け、抱擁させなければならぬ。あの日を思い出すにはいられない。きょう、私は戦争の悲劇を再び繰り返すことのないよう、被災者の苦痛を語りつゝ責務がある。

(長岡京市・溝口宏・66)

馬町の空襲

京都空襲を忘れるな

一月十六日は東山区馬町に爆弾がおとされた日です。死者四十一人、負傷者四十八人、被害家数三百六十六軒、被災者七百二十九人。いまもお後遺症で苦しんでいる方もあるのです。しかもなんの補償もなく、ただひとり、三十年の苦しみを受けつづけていからもー。忘れてはならないことです。知れたい人には自身近況を語り、語りつゝが、あつたことを知って、いたきたいてい思つてほすべし。

長岡京市・溝口宏

京都空襲の悲惨語り継ぐ責務がある

長岡京市・溝口 宏

(無職・72)

手元に一通の手紙がある。十六年前、本紙「窓」欄の私の拙文「京都にも空襲があった」が、目に止まったという女性からのものだ。「あの時から三十九年もたつのに覚えておられた方がおつたのには感激しました。名前を見て、かつての息子の担任の先生と知り感動しました。」と。終戦の年の一月十六日深夜、東山区馬町一帯は米軍機の爆弾で八十九人の死傷者を出し、修羅場と化した。

私は二十七年前、京都空襲を記録する会の一員として府内の調査に加わり、この事実を知った。「かくされてきた空襲」として発刊された。私はこの手紙で、彼女の家族も被災されたことを知った。「姉と五年生の男の子が即死しました。」と、四枚の便箋に綿々と記されていた。悲しみを胸に秘めて働き続けてこられた彼女。私には戦後はないとも。彼女の心の中、かばかりであろうか。 S校の児童にも死傷者があつた。校卒の画家がかかれた十八枚の絵「馬町空襲」がある。平和学習の一環として取り上げてほしいもの

だと思っている。毎年、年が明けると二月十六日をおぼえ、生徒動員中、級友を失い、九死に一生を得た私は、戦争の悲惨、平和の尊厳を語りつゝ責務がある。

40年前の今日 京都に大空襲

長岡京市・溝口 宏

(教員・57)

一月十六日、四十年前のこの日の深夜、東山区馬町一帯は、B29の爆弾によって修羅場と化した。

当時の新聞は「被害は軽微なり」と報じたのみでした。生徒動員先の舞鶴で空襲を受け、帰京してまもない「馬町に爆弾が落とされたらしい」と、うわさ話でして耳にした記憶があります。

十二年前「京都空襲を記録する会」の一員として、府内一円の空襲調査に加わりました。その中で馬町空襲は、死者四十一名、負傷者四十八名という大惨事であつた実態が明らかとなりました。「かくされてきた空襲」にまごめられていきます。

最近刊行された「写真でみる京都100年」には、被爆跡が掲載され、京都大事典には「京都空襲」の項があり、十数行の記述があります。

私たちは核狂乱の今日、機あることに戦争の悲惨さを語り継ぐ責務を一層痛感します。はじめに命ありき、子供ありき、教育の原点に立っていかになすべきを問ひ続けたいと思います。犠牲者のごめい福をお祈りし、永遠の平和を誓つたものです。

今、肉親をなくされた知人の老女からの手紙を渡しながら読み返しています。山梨水明のこの京都にも、怒るし戦争の惨禍があつたのです。

京都空襲語り 継ぎ平和願う

長岡京市・溝口 宏

(無職・66)

今年も、一月十六日がめぐってきた。終戦の年、昭和二十年のこの日の深夜、東山区の馬町一帯は、米軍機の爆弾によって、一瞬にして修羅のちまたと化した。「かくされてきた空襲」(京都空襲を記録する会)には、死傷者八十九人と記録されている。修道校の児童ら幼い命も奪われている。五十回忌を迎える。家族を失った知人の老女の心の中に思いをいたすと、私の胸は痛む。彼女の戦後は終わつてはいない。終戦直後、生徒動員から帰京した当時、東山に爆弾が落とされた。追及しようとはしなかつた。二十年ほど前、空襲犠牲者市民追悼集に参列した。記録する会が創立されると進んで参加、府内一円の空襲の実態を調査した。被害箇所三十九、八百数十人の死傷者が判明した。京

京都空襲を記録する会に

都にも空襲があつたことが実証された。

生徒動員中、九死に一生を得た私は、戦争体験を語り継ぎ、戦争の悲惨、平和の尊厳を訴えるのは当然の責務である。一月十六日は、平和を志せる日としたい。犠牲者に対し、ごめい福をお祈りする。合掌。

都にも空襲があつたことが実証された。

生徒動員中、九死に一生を得た私は、戦争体験を語り継ぎ、戦争の悲惨、平和の尊厳を訴えるのは当然の責務である。一月十六日は、平和を志せる日としたい。犠牲者に対し、ごめい福をお祈りする。合掌。